

9. ≪「東下り」貴族は、地元豪族のボディガード?!≫

武士が誕生していない平安初期を舞台に「伊勢物語」が書かれます。主人公は、貴族であり百人一首の歌人でもある在原業平（ありわらのなりひら：生没年 825－880 年）といわれています。

「伊勢物語」の「東下り」の段に、有名な「名にし負わばいざ言問わむ都鳥 わが思ひ人はありやなしやと」という歌が登場します。意味は、「都という名を持っている鳥よ、さあたずねよう、私が思う人は無事でいるかどうか」。隅田川の渡しで、ユリカモメ（都鳥）を見て詠まれました。渡しは、隅田川の言問（こととい）橋ではなく、その上流にかかる白髭（しらひげ）橋付近にありました。

やがて「東下り」は、平安遷都の約 150 年後に、平安京を揺るがす大事件を引き起こします。それは、平安京に遷都した桓武天皇の孫が、東下りしたあと土着し、その嫡流たちの内紛から始まりました。（注1）

この内紛の時期から、関東地方は、武装豪族が武士となっていくます。「東下り」に見る婿取りシステムは、地域豪族側にとって権力から身を守るボディガードを意味します。つまり、婿より妻側の地方豪族が優位に立っているわけで、坂東武士が樹立した鎌倉幕府も室町幕府も、血縁のある外戚が力を持つことになりました。（注2）

注1：平安遷都の約 100 年後、桓武天皇の孫の高望王が、平の姓をもらって上総介（上総国における No 2 の役職）となって任地に赴きますが、帰任せず土着します。そして大事件は、その平高望の子供と孫の内乱から引き起こされたのです。

注2：源頼朝が樹立した鎌倉幕府は、妻側の北条氏に乗っ取られ、足利尊氏が樹立した室町幕府は、母方の上杉家が力を持ちます。

写真 ①百人一首の在原業平（y a h o o ブログ「道端の出会い」より）、②「風流錦絵伊勢物語」勝川春章画。第9段の東下り隅田川の景。（Wikipedia より）、③白髭橋の位置（y a h o o 地図に細見が位置を記入）

①



②



③

